複雑化する日本の安全保障

Vol.54

戦艦が退場するまで

軍艦の設計には、基本となる戦略の反映があります。日本海軍の場合には米国海軍との決戦という想定がありました。艦隊決戦という考えは1930年代においては至極当然のもので、その中核を占める戦力としてこれまで議論してきた戦艦が考えられていたのです。決戦が実現するかどうかは難しい問題ということは以前お話ししましたが、そうした前提で兵力の整備を行うということは合理的な考え方でした。兵力の構成は戦艦だけではなく、いろいろな種類の補助艦艇があります。潜水艦もその一つです。

ドイツの潜水艦の活躍は目覚ましいものがありました。元々、通商破壊作戦だけでなく敵主力艦隊の行動の監視や襲撃のための装備として一定の役割は想定されましたが、あくまでも補助的な存在でした。日本の場合も同様で、カリフォルニア州サンディエゴとハワイ真珠湾を根拠地とする米海軍が、当時植民地だったフィリピンの防衛乃至は奪回のため西進してくるのを西太平洋で邀撃するという考え方が艦隊を設計する基本で、潜水艦は敵艦隊の行動を監視するとともに機会を捉えて襲撃して敵勢力を漸減させることが役割でした。そうした役割を与えられた潜水艦には、索敵のための巡洋潜水艦と攻撃のための海大型の二系統がありました。伊400は攻撃型の極致といって良いでしょう。

米海軍の悩みは太平洋と大西洋という二つの戦域に対応しなくてはならないことです。艦隊を二つ持つということは経済的な負担だけでなく人的資源の点からも難しいことでした。ですからパナマ運河を通って行き来するということをせざるを得なかったのです。言い換えれば、パナマ運河を通過できないようなサイズの主力艦を持つことはできないということです。日本海軍が大和級の戦艦を計画したことは、米海軍が持つことができない巨大主力艦とその主砲によるアウトレンジからの攻撃で決戦に勝利するという計画があったということです。今では「大艦巨砲主義」をいう言葉は否定的なニュアンスを持って使われていますが、当時においては極めて合理的な発想だったことがお分かりいただけるでしょう。別の考え方をすれば、パナマ運河を破壊すれば米海軍の能力は大きく低下するということにもなります。伊400建造の背景については、パナマ運河襲撃が目標だったのか、それとも一段と壮大な構想として米国の首都ワシントンを含む東海岸の主要都市への攻撃まで視野に入れたものであったのか、確定的なことは言えません。連合艦隊司令長官だった山本五十六の発案だったということは間違いないようですが、建造意図について書かれたものはないようで関係者による聞き書きが残っているだけです。対艦攻撃兵器として発展した潜水艦にとって、このような戦略目的を付与することは革命的なことであり、構想としては戦略原潜の鼻祖と言えるでしょう。

戦史を通じて感じることは、日本海軍が「伊400」のような先進的な戦略発想に恵まれていたことです。もう一つの、そして大戦の帰趨に決定的な影響を与えた先進的なケースは1941年12月9日に航空機によってマレー沖で英国の戦艦2隻を撃沈したことです。この7カ月前にドイツの戦艦が撃沈される過程では「ゾードフィッシュ」という英海軍の複葉雷撃機が活躍し、雷撃により舵機を破壊する殊勲は上げましたが沈没させるには至りませんでした。マレー沖のケースでは、大型固定翼機による爆撃と雷撃とにより主力艦が2隻沈められています。水平爆撃と鈍重な大型固定翼による雷撃ですら前代未聞な戦果を挙げることができたのですから、そうした用途に特化した機体を持つ急降下爆撃機と雷撃機とが格段の戦果を挙げることは十分想像できましたし、その後の海戦でも実証されていきました。主力艦が副砲を下して対空砲や対空機関銃を多数装備するようになったのも、新たに出現した航空機という脅威に対抗するためです。さらにレーダーや近接信管といった新しい機材が開発配備されるにつれて日米の力の差が出てくるようになりました。もう一つ日米間で重大な差異になったのがパイロットの育成能力の優劣でした。国土が広大な米国では早くから航空輸送が発達するとともに農薬散布などの目的で民間にパイロットが多数存在したのです。損耗するパイロットを補充する能力の差が戦力の差となって表れてゆきました。

水上艦同士の戦いという二次元での戦闘は能力を比較することが容易でしたから戦力の比較をいうことも可能でした。しかしながら航空機と潜水艦の登場によって海戦の様相が三次元の複雑なものとなると戦力を比較することが格段に難しくなり、新たに開発された技術の能力の差異や実装に至るまでの時間差などによって優劣の差異が生じるようになりました。主力艦の数を数えることで戦力の優劣を比較できるような時代は終わったのです。それは同時に大艦巨砲という発想の終わりでもありました。

以前お話したことですが、新しい技術の登場に積極的に向き合うことをしなければ頽勢に追い込まれます。緒戦を有利に進めながら、自らが実証した艦艇に対する航空機の優勢という事実に対応することに遅れて敗北に追い込まれた日本海軍の問題点については既にいろいろな分析がなされているので差し控えます。

最後に申し上げたいのは、自らが最大の不利を被ることを承知で「ドレッドノート」の開発を進めた英海軍の勇気は称賛されるべきだ、ということに尽きます。

西 正典
Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループシニアアドバイザー、トランス・パシフィック・グループ会長 (https://www.transpacificgp.com/)。